

島根県

言えなかった「ありがとう」

益田東高等学校

三学年 熊谷 華純

「おじいちゃん、あと一ヶ月だって。」

こんなことを突然知らされるなんて、テレビの中の出来事だと思っていました。

去年の一月。父から、祖父がガンであることを聞かされました。しかも、それは末期のガンで、もう手の施しようがなく、祖父は死を待つことしか出来ないと言われたのでした。祖父は、その前の年の冬にも肺炎で入院していたことがありません。なぜその時に、だれもガンだと気づかなかったのか、やり場のない思いに、お医者さんを恨んだりもしました。しかしそれは言っても仕方のないことで、それよりも、大好きなおじいちゃんと永遠のお別れをしなければならぬという現実の方が、私に辛くのしかかりました。

その後、一度は元気になった祖父でしたが、だんだんご飯を食べなくなり、見る見るうちに痩せていきました。私は、毎日お見舞いに行きました。正直、お見舞いに行くことが辛いときもありました。でも、私にできるたった一つのこととは、少しでも多く祖父の側にいてあげることと思い、お見舞いを続けました。病室での祖父は、たくさんの機械に囲まれたベッドの上に、酸素マスクをつけて横たわっていました。もう祖父は私と会話することも出来ませんでした。そして五月十五日、祖父は帰らぬ人となりました。父に聞いたことより、三ヶ月も長く生きてくれた祖父。この闘病生活は、とても苦しいものだったと思います。

「えらかったなあ。よう頑張った。」

祖父に語りかける父の言葉を聞いたとき、私の目から涙があふれて止まらなくなりました。祖父にお世話になりっぱなしだった私には、祖父の生きざまは、「すごい」の一言に尽きます。祖父が物言わない人になってから、力を落としているおばあちゃんの手を、葬儀の間、片時も離さずにつと握ってあげました。私にできることはそれが精一杯だったからです。

祖父のお葬式で、お坊さんがこうおっしゃいました。

「おじいちゃんには、恐らくみなさんに言えなかった『ありがとう』があったと思います…。」

反対にみなさんにも、おじいちゃんに言えなかった『ありがとう』はありませんか？。」

お坊さんの言葉を聞いて、私の中にも、祖父に言えなかった「ありがとう」がたくさんあることに気がつきました。みなさんは「ありがとう」が漢字で書けますか？有ることが難しいという意味で、「有り難う」と書きます。

小学生の頃から習い始めたピアノ・書道と、いつも祖父が送り迎えをしてくれました。祖父がいたからやりたいことに挑戦でき、祖父のお陰で続けることができました。でも私は、祖父に「ありがとう」を伝えることがありません。祖父が送り迎えをしてくれることを当たり前で思っていたのです。お坊さんの言葉を聞くまでは。

もう遅いかもしれないけれど、私が祖父に言えなかった「ありがとう」を、今、伝えたいと思います。

「おじいちゃん。嫌な顔をせず、いつも送り迎えしてくれてありがとう。そして亡くなるその日まで、一生懸命頑張って生きてくれてありがとう。」

「ありがとう」は、言われることもうれいですが、言うこともうれいものです。みなさんは、言い忘れている「ありがとう」を持っていませんか。「どういたしまして」という返事がもらえるうちに、勇気を出して言葉にしてみることをお勧めします。

今私は剣道部に入っています。「ありがとう」を心の底から大きい声で言えるように思いながら、気合いを入れて臨んでいます。祖父には言えなかった感謝の心を、素直に声に出して形で伝えたいと思っています。

「おばあちゃん、いつも優しくしてくれてありがとうね…。」

「おばちゃん、たけのこ(ご飯)おいしかったよ、ありがとうねえ。また作ったらちようだいね。」

「先生、数学の問題が全部解けました。ありがとうございました。」
祖父がお坊さんを通して、この大切さを教えてくれました。祖父の生きてきた姿は、今からの私の道しるべとなり、祖父の言葉は、忘れられない教訓ともなりました。
祖母から両親へ、両親から私へ。私から私の子ども・孫達へと、命のバトンは確実につな
がります。だから、いいことを語り伝えていきたいのです。いいことを語り伝えること、この
ことが私に与えられた、「人」としての使命であり、祖父が残してくれたメッセージなのです
から。